

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00103

研究課題名(和文)15世紀ブルターニュ公家をめぐり子孫繁栄祈願の表象

研究課題名(英文)Representation of Wishes for the Prosperity of the Ducal Family of Brittany in the Fifteenth Century

研究代表者

田邊 めぐみ(TANABE, MEGUMI)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：30804091

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：フランス中世末期の図像や装飾の意味・機能は未解明のままにあるものが多い。従来の様式論や図像学では、この時代の美術全般に認められる聖俗の混淆、図像典拠の多様性、様式の汎ヨーロッパ性を十分に理解することは不可能なのである。本研究では、15世紀のブルターニュ公家のために制作された祈祷書を多角的に検討することで、キリスト教図像の意図的な変化や、世俗図像の象徴機能によって子孫繁栄祈願の表象が様々に生成されていることを明らかにした。それは写本の制作背景の特定に有用な視座と方法論の提示に繋がっただけでなく、隣接しない文化間の比較的視座が古の文化・社会の研究に非常に有効であることを証明することにもなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フランス中世末期の子孫繁栄祈願表象を考察した本研究の成果は、異なる専門分野を架橋することの学術的意義を示しただけではなく、キリスト教世界と古代ギリシャ・ローマ世界、ブルターニュ公国とフランス王国、写本文化と印刷文化といった様々な対立構造の境界が動態であり、そこに見いだせる「あいだ」という立ち位置こそが昨今の様々な次元の紛争解決への指針ともなり得る点で、人文系研究の社会的意義を示しているといえる。

研究成果の概要(英文)：The meanings and functions of late medieval French iconography and ornament have not been fully explored. Traditional stylistics and iconography do not provide a complete understanding of the fusion of sacred and profane elements, the diverse iconographic sources, and the pan-European nature of the art style of this period. Through an examination of the 15th-century Books of Hours produced for the ducal family of Brittany from various perspectives, this study demonstrates that the representation of wishes for prosperity is achieved through intentional modification of Christian iconography and the symbolic function of secular iconography. This not only provides a valuable perspective and methodology for identifying the context of Books of Hours production but also shows that a comparative perspective between non-adjacent cultures can be beneficial in studying ancient cultures and societies.

研究分野：美術史学

キーワード：時祷書 ブルターニュ キリスト教図像学 植物装飾 子宝祈願 弔い 15世紀 中世末期

## 様式 C-19、F-19-1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

14世紀後半以降、平信徒の個人用祈禱書としてフランスを中心に急速に普及した時禱書には、写本注文主や所有主の意向が反映されていることが多い。このような特質は、もっぱら写本の物質的な構造や、祈禱文の内容・構成、紋章や祈禱像、そして挿絵の主題選択から指摘されてきた。一方、伝統的なキリスト教図像や欄外装飾については、主に写本の帰属・集成作業の一環をなしてきたため、様式を異にする写本間の関連性が問われることはなかった。

報告者は2008年にフランス国立パリ第十大学で博士号(美術史学)を取得した論文 *La signification et la fonction symbolique de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XVI<sup>e</sup> siècle* で、ブルターニュ地方由来の時禱書を対象に、植物装飾の意味と象徴機能の研究成果を報告していた。かかる研究は、従来「意味なき装飾」として見なされていた写本の欄外を彩飾する植物装飾の有意性を明らかにした点で非常に画期的であったが、様式的観点からブルターニュ地方に帰属・集成されていた写本群に一貫した要素は見いだせず、各写本の彩飾と注文主の関係を調査する必要が新たに生じていた。

そこで着目したのが、時禱書本来の役割である「祈禱」の個人的側面である。典礼で用いられる聖務日課書を簡略化した祈禱文やそれを彩飾する伝統的なキリスト教図像は、一見画一的な「贖罪」の表象に見えがちではある。しかし、俗語の私的な祈禱文や祈禱内容に応じた紋章、祈禱像の挿入・配置といった注文主の痕跡が様々な形で残されている事実を踏まえれば、伝統的なキリスト教図像の改変や、それらとは意味的な関係を有さないと考えられてきた世俗主題の欄外装飾もまた、絵師の気まぐれや知識不足ではなく、注文主の具体的な「願い」に由来する蓋然性は極めて高いことが推察し得た。実際、報告者が2011年から取り組んでいた時禱書における祈念表象の研究によって、ブルターニュ公家の公位継承問題が、写本彩飾の構成諸要素に反映されていることが断片的に明らかになっていたのである。

ブルターニュ地方に由来する時禱書は、異なる地域で彩飾されたり、広範に活動する絵師たちの手になるものが多いうえ、エバーハルト・ケーニヒによって推察されたナントやレンヌにおける写本画アトリエの存在にも疑問符がついている。それ故に、美術史の見地から彩飾と地域との関連性を問う意義は見出されていなかった。それはまた、専ら様式的観点から論じられてきたために、写本の注文・制作・使用・継承の実態が十分に解明されてこなかった理由でもある。ブルターニュ地方の歴史的・社会的背景と写本彩飾の関係から写本間の繋がりを問う本研究は、意義のある地域研究の一例を提示することにもなるだろう。

また、かかる研究過程で必要となる視座や方法論は、聖俗の著しい混淆、図像典拠の多様性、様式の汎ヨーロッパ性といった問題故に、未解明のままにあったフランス15世紀美術作品の考察に大きく寄与し得ることが期待できた。さらに、古今東西に存在した「祈り」という「動態」が「静態」としての文物にいかんにか反映されているのかを捉えるためには、西洋中世美術研究にはとかくマイナス要因として捉えられがちな「キリスト教文化圏外の研究者」という立ち位置が非常に望ましいものである可能性も窺えた。異なる専門分野、時代、文化を架橋しながら、「部分」としての個々の事例と、それらの「全体」との関係性を絶えず問うことが求められる本研究の成果は、存在理由さえも懐疑され始めている人文研究の意義を改めて認識せしめることになりはしまいか。

### 2. 研究の目的

以上の問題意識から着手した本研究の具体的な目的は、以下三点である。

#### (1) 時禱書に託された個人的祈念は、図像や装飾によって如何に表現されたのか？

中世末期に制作されたフランス写本の中でも、特に特定の個人のために注文・制作されることの多かった時禱書には、独創的な図像プログラムが多数認められる。しかしながら、それらを読み解く手段や方法は未だ十分に見出されてはならず、殆どは看過されたままになっている。本研究の対象は、15世紀から16世紀にかけてのブルターニュ公家とその周辺の者たちが所有した時禱書に留まるものの、伝統的なキリスト教図像の部分的な改変や、装飾モチーフの有意性から図像プログラムに託された具体的な祈念を解き明かすための視座や方法を提示することにより、同時代の他の彩飾写本や、様々な芸術媒体の注文・制作・継承背景の理解に寄与することを目指す。

#### (2) 「個人的祈念表象」それ自体と、そこに込められた祈念内容の関係は、如何に継続、連鎖、あるいは変容し得るのか？

時禱書は婚約や結婚の際に注文・制作され、親族内で継承される場合が多く、そこに子孫繁栄祈願が様々な表象されている蓋然性は極めて高い。実際、本書に含まれる多種多様な「豊穡」の表象と、神の祝福によって子宝に恵まれた聖女たちの図像は無関係ではないことが先行研究によって既に指摘されている。また、結婚がカトリック教会の七秘跡に含められていることを踏まえれば、全ての贖罪の表象が子孫繁栄祈願に繋がるものであった可能性も窺える。そのいっぽうで、そうした祈念が託された時禱書が親族内外で継承される時、形態と内容の関係が変容していたことも推察し得る。本研究では15世紀から16世紀初頭という、およそ一世紀の間に制作・継承された時禱書を対象とし、その注文当初から継承過程を経る中で具体的に何がどのように変化、もしくは継承されたのかを考察する。そしてそれらが他の地域を交えながら、いかなる連鎖

反応を生んでいたのかを明らかにすることを目指す。

### (3) 祈念表象の構造は、普遍的なものなのか？

本研究の対象となる子孫繁栄祈願は、古今東西に存在したものである。かかる事実は、ブルターニュ公家のために制作された時祷書における一見それとは判別し難い祈念表象を、異なる時代・媒体・文化圏における多種多様な「祈りのかたち」を生成する諸要素との比較検討によって浮き彫りにし得る可能性を示している。そしてそれはまた、「キリスト教文化」という枠組みの中で専ら捉えられてきた図像や装飾を、風土や生と死、性別、時代といった様々な「境界」の問題に対峙させることでもある。さらに、「祈り」という行為が動態であることを踏まえれば、形のない現在進行形の「願い」のありようが、「静態」としての祈念表象の構造理解に繋がることも考え得る。以上の観点からブルターニュ時祷書における祈念表象を考察することで、「時代錯誤」もしくは「文化錯誤」を超越した表象研究のあり方を提示することを目指す。

## 3. 研究の方法

上記の目的に基づき、本研究ではブルターニュ公家の公位継承問題において特に重要な 1431 年頃、1450 年代、16 世紀初頭の三期にそれぞれ制作された以下 3 点の時祷書を中心に調査を進めた。



聖母子像に祈りを捧げるマルグリット」(BnF, ms. lat. 1156B, fol. 25)

### (1) 『マルグリット・ドルレアンの時祷書』(フランス国立図書館、ms. lat. 1156B)

本写本の欄外には、多くの「高貴な人々の姿」が描かれている。それらを同定する要素は明示されておらず、キリスト教主題のミニチュールとの関係も一見不可解ではあるが、報告者は 1430 年から 1431 年にかけて同家の者達が相次いで婚約・結婚していたことを踏まえた上で、ブルターニュ公家の者達と断片的に同定するに至っていた。いっぽう、オルレアン公家のシャルル(1394-1465)がブルターニュ公家に嫁ぐ妹マルグリット(1406-66)のために注文したと考えられている本写本には、1429 年のオルレアン解放や、当時イングランドに捕囚されていたシャルルの解放祈念を喚起する図像を確認していた。そこで、1430 年前後のマルグリットの生家と婚家の状況と、両家のために制作された時祷書との相互関係を踏まえながら、同一写本において異なる「家」の繁栄祈願が如何に併存し、機能していたのかを考察した。



「神殿奉獻」(BnF, ms. lat. 1159, fol. 65 verso)

### (2) 『ピエール 2 世の時祷書』(フランス国立図書館、ms. lat. 1159)

本写本には、ブルターニュ公ピエール 2 世(在位:1450-57)の兄弟であるフランソワ 1 世(在位:1442-50)とジル(†1450)が相次いで亡くなり、叔父アルチュール 3 世(在位:1457-58)から従弟フランソワ 2 世(在位:1458-88)へと公位が継承された 1450 年代の公家の状況が、「甲い」と「子宝祈願」の表象によって示唆されていることを、報告者は「4 月の月暦図」「神殿奉獻」「埋葬」や、諸聖人の図像プログラムに確認していた。また、本書がピエール 2 世からフランソワ 2 世の妻となるマルグリット(1443-69)へと継承される過程で「聖アンナ三代図」に紋章が加筆されることにより、新たな子宝祈願の表象が生成されたことも指摘していた。いっぽう、同時期に制作されたと考えられるフランソワ 1 世の妻イザベル・スチュアート(1427 頃-94 頃)の時祷書(フランス国立図書館、ms. lat. 1369)には、ピエール 2 世とは別の立場から見た公家の状況が描き出されていることが窺えたため、彼女が所持した他の時祷書を含めて「甲い」と「子宝祈願」の表象の成り立ちと各写本の継承過程を併せて考察することで、「子孫繁栄祈願」を介した写本間の繋がりと、そこに認められる差異の要因を検証した。



「三王礼拝」(BnF, ms. 9474, fol. 64 verso)

### (3) 『アンヌ・ド・ブルターニュの大時祷書』(フランス国立図書館、ms. lat. 9474)

報告者は、本写本の「4 月の月暦図」「ピエタ」「アンヌの祈禱像」「三王礼拝」「聖家族」に認められる一見不可解な諸要素を多角的に分析することから、ブルターニュ公国の命運を背負ったアンヌ(1477-1514)自身の子宝祈願と、娘クロードの婚約記念に関する独創的な祈念表象を確認していた。かかる成果は、長く推定段階にあった本写本の制作年を 1504-07 年と特定するのみならず、アンヌが 1491 年にフランス王シャルル 8 世(在位 1473-98)と結婚、ルイ 12 世(在位 1498-1515)との再婚を経て、1514 年に死去するまでの期間に所有した時祷書の注文・継承背景などを祈念表象の考察から明らかに出来る可能性を示していた。そのため、アンヌの政治的な立場

と「子孫繁栄祈願」の関係を踏まえた上で、従来アンヌの蔵書と見なされてきた写本間の繋がりと断絶を検証するとともに、それらと彼女の2人の夫や、後にフランスに君臨することになるフランソワ1世（在位1515-47）の母ルイズ・ド・サヴォワ（1476-1531）が所持した写本彩飾との比較考察を行い、それぞれの政治的立場が子孫繁栄祈願の表象にいかんにか反映されているのかを問うた。また、15世紀末から16世紀初頭にかけてのフランスは、古代ローマ文化との直接的な接触によって図像体系が大きく変容した時期でもあるため、写本以外の媒体をも含めてルネサンス期の子孫繁栄祈願の表象を調査した。

#### 4. 研究成果

以上の調査は、購入した書籍やインターネット上で公開されている史資料の参照、フランス、イギリス、スペインの図書館、美術館での写本閲覧と関連文献の参照、国内外で開催された学会、シンポジウム、研究会での研究発表、そして異なる宗教の「祈りの場」の訪問によって進め、以下の成果に至っている。

##### （1）祈念表象の共通項としての「百年戦争」

『マルグリット・ドルレアンの時禱書』に生家と婚家の繁栄祈願表象が併存しているのは、本書がマルグリットの結婚の際に注文されたためであることを推察していたため、当初は1430年頃にオルレアン公家とブルターニュ公家のために制作された時禱書の比較考察を進め、両家の子孫繁栄祈願表象の類似性と相違性を確認する予定でいた。しかし、実際には百年戦争に関する様々な図像や象徴モチーフと、イングランドとフランス王家の間で不安定な立ち位置にあったブルターニュ公ジャン5世の治世（1399-1442）の状況との因果関係が浮き彫りとなり、当該期間にブルターニュ公家の者のために制作された時禱書に生家と婚家の子孫繁栄祈願が併存しているのは、フランス王家側にブルターニュ公家を位置づけることを目的とした政略結婚が、その所以であることが明らかになっている。また、百年戦争関連の図像が含み持つ政治的意味を確認することで、『マルグリット・ドルレアンの時禱書』に描かれた様々な人物像の特定が可能になっただけでなく、彼女の異母弟である私生児ジャン（1402頃-1468）の時禱書（ロンドン、大英図書館 Yates Thompson Ms. 3）の注文・彩飾期間の大幅な見直しや、ジャン・ド・モンタンが注文・所持したと考えられてきた2冊の時禱書（フランス国立図書館 ms. lat. 18026；レンヌ市図書館 ms. 1834）の制作年とそれぞれの制作背景を特定するに至っている。

##### （2）「子宝祈願」と「甲い」の共振

ブルターニュ公ピエール2世と、前ブルターニュ公フランソワ1世の妻であったイザベル・スチュアートがそれぞれ所持した時禱書の比較考察は、どちらも1450年に逝去したフランソワ1世の甲いと、彼の遺言によって1455年に挙行された長女マルグリットと後のフランソワ2世の結婚に由来するブルターニュ公家（モンフォール家）の子孫繁栄祈願が様々な表象されていることを解明することとなった。しかし、さらに考察を進めることにより、それらに確認し得る子孫繁栄祈願表象の違いは、彼らの性差によるものではなく、一方は子宝に恵まれる可能性のない権力者、他方は夫を失い、彼女自身だけではなく二人の娘の命運もまた不安定なものであったという、それぞれの状況に対応したものであることを確認するに至っている。そしてイザベルの時禱書と、同じく夫を失っていたヨランド・ダラゴンが注文した時禱書（ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館 ms. 62）との類似点と相違点を介して、「寡婦の子孫繁栄祈願」という、現在まで看過されてきた観点を新たに提示することにもなった。

##### （3）たゆたふ祈念表象

フランス王妃兼ブルターニュ女公であったアンヌ・ド・ブルターニュが所持した時禱書については多くの研究が重ねられてきたが、本研究において「子孫繁栄祈願」の表象から各写本の注文・制作・継承経緯を改めて考察することにより、彼女が自分自身のために制作させたことが確認できたのは、現在フランス国立図書館（BnF. ms. lat. 9474；ms. NAL. 3120）とナント市立図書館（Nantes, Bm. ms. 18）にそれぞれ所蔵されている3冊に留まった。それらが、夫シャルル8世を亡くしたアンヌが寡婦として過ごした時期から、ルイ12世との再婚によって懐妊し、その後世継ぎの男児誕生を希いながらも叶わず、長女クロードが後のフランス王フランソワ1世と婚約することになるまでの期間に対応することを明らかにすることによって、各写本にはシャルル8世と、彼との間に誕生しながらも早世した2人の男児の甲い、フランス王家とブルターニュ公国それぞれの世継ぎ誕生に対する祈願が様々な形で表象されていることを確認した。

かかる祈念内容の変遷は、各写本の制作年を特定せしめただけではなく、古代ローマ文化との直接的な関係からフランスにおいて新たな「豊穡」の表象が生まれていたこと、そしてアンヌの蔵書の中で最も豪華な装飾で知られている『大時禱書』にあつては、彼女の政治的立場の変遷に伴って祈念表象が変化する「たゆたひ現象」の解明にも繋がっている。

さらに、以上の研究によって明らかになった多種多様な子孫繁栄祈願の表象を介して、長く未解明のままにあった様々な支持体の作品（『マリ・ド・ブルゴーニュの時禱書』（ウィーン国立

図書館 cod.1857,14v);《心を贈る》(ルーヴル美術館、0A.3131);《パンジーの婦人》(同、Inv.9925);《貴婦人と一角獣》(パリ、クリュニー美術館);《男女の肖像》(パリ、装飾芸術美術館、Inv.21121)が、それぞれ婚約や結婚、死に関連する祈念表象であることを指摘するに至っている。

なお、以上の成果には2019年度から継続している関西大学東西学術研究所の風景表象研究班の活動(2024年度で任期終了)や、鹿島美術財団の「美術に関する国際交流援助」事業(2024年3月)も含まれる。いっぽう、本研究期間中に予定していたカルースト・グルベンキアン美術館(リスボン)と、モーガン・ライブラリー(ニューヨーク)での調査については、資金不足のため実施できなかった。現在、他機関に助成を申請中である。

未だ多くの課題を残してはいるが、本事業の初年度がコロナ禍にあったことを利用して、当初は予定していなかった日本の寺社訪問や、日本の文物における祈念表象の調査が可能となったことや、調査や成果発表の際に訪れたイギリス、フランス、スペインで異なる時代の「祈りの場」や、巡礼記念バッジをはじめとした子孫繁栄祈願に関する様々な文物の存在を知ったことで、15世紀のブルターニュ公家に関する祈念表象を広い時空から捉える視座を得るに至っている。

今後、異なる分野・文化の研究者と協力し、「「あいだ」の表象 フランス中世末期のイメージ生態学」「時間的リズムと空間的リズム 時をめぐる物質と非物質」というテーマのもとに研究成果をさらに発展させ、以下の事業に順次結実させてゆく：単著『装飾のむこう ブルターニュ公家の子宝祈願と甲いのかたち』；国際セッション「祈りのかたち：祈りの境界、祈りの性別、祈りの中の時間、祈りと風土」；展覧会《Beyond Things》；トリロジー『Polyphonic Art History』。

多くの画期的な成果を得ることが出来たのは、様々な境界を越えた実に多くの協力者のお陰である。記して感謝の意を表したい。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田邊 めぐみ	4. 巻 40
2. 論文標題 祈りのあとさき：『アンヌ・ド・ブルターニュの大時禱書』をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Stella	6. 最初と最後の頁 103～125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4752565	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Megumi TANABE	4. 巻 20
2. 論文標題 LES FLEURS PARLANTES DANS LES LIVRES D'HEURES D'ANNE DE BRETAGNE	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Pecia	6. 最初と最後の頁 173-201
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件/うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Megumi TANABE
2. 発表標題 LA REPRESENTATION DES VOEUX DANS LES GRANDES HEURES D'ANNE DE BRETAGNE
3. 学会等名 Research Centre for European Philological Traditionセミナー《Bibles, Gospels, Breviaries and Books of Hours》（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田邊めぐみ
2. 発表標題 「戦いの風景」に見る記憶と記録～ブルターニュ公家の時禱書をめぐって
3. 学会等名 2022年度東西学術研究所風景表象研究班研究例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Megumi TANABE
2. 発表標題 From Anne of Brittany to Claude of France: the sinuous female succession of the Duchy of Brittany
3. 学会等名 Female Succession in Late Medieval and Early Modern Monarchy: Contestation, Conflict and Compromise (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Megumi TANABE
2. 発表標題 Looking or Praying? Iconographic Networks of the Visitation
3. 学会等名 International Medieval Congress 2023. Session Number: 327, Entanglements of Faith and the Senses, III: Seeing Mary(an) Devotion in the Middle Ages (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田邊めぐみ
2. 発表標題 アンヌ・ド・ブルターニュの祈りのかたち～子宝祈願と甲いの共振
3. 学会等名 国際叙事詩学会日本支部 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田邊めぐみ
2. 発表標題 花のものの言ふ～時季の表象から辿る祈りの風景
3. 学会等名 関西大学東西学術研究所「風景表象史研究」中間総括ワークショップ
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田邊めぐみ
2. 発表標題 母と娘の情景～現実と願いのあいだ
3. 学会等名 東西学術研究所風景表象研究班研究例会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Megumi TANABE
2. 発表標題 The Dual Structure of the Crisis Representation in the Books of Hours for the Ducal House of Brittany
3. 学会等名 Leeds International Medieval Congress 2024, Session No. 1218 'Visualising Crisis During the Late Middle Ages I: Images of Crisis' (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田邊めぐみ
2. 発表標題 『イザベル・スチュアートの時禱書』に見る願いのかたち～「生」と「死」の接続から生まれ出づるもの～
3. 学会等名 第77回美術史学会全国大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Megumi TANABE
2. 発表標題 REPRESENTATION DU DEUIL OU DU DESIR DE MATERNITE? L'ICONOGRAPHIE DE DAVID ET GOLIATH DANS LES LIVRES D'HEURES D'ANNE DE BRETAGNE
3. 学会等名 COLLOQUE GRAPHE: DAVID ET GOLIATH, UNIVERSITE D'ARTOIS (国際学会)
4. 発表年 2024年



1. 発表者名 田邊めぐみ
2. 発表標題 「豊穡」の情景～15世紀ブルターニュ公家の時禱書をめぐって
3. 学会等名 東西学術研究所風景表象研究班研究例会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Egawa Atsushi, Marc SMITH, Megumi TANABE, Hanno WIJSMAN (dir.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 EDITIONS DE LA SORBONNE	5. 総ページ数 350
3. 書名 HORIZONS MEDIEVAUX D'ORIENT ET D'OCCIDENT: REGARDS CROISES ENTRE FRANCE ET JAPON	

1. 著者名 Miguel Metelo de Seixas, Laurent Hablot, Matteo Ferrari (dir.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Instituto de Estudos Medievais (IEM)	5. 総ページ数 440
3. 書名 DEVISES, LETTRES, CHIFFRES ET COULEURS: UN CODE EMBLEMATIQUE, 1350-1550	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>—東西学術研究所々報 第九十七号  <a href="https://www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/publication/asset/report/report_97.pdf">https://www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/publication/asset/report/report_97.pdf</a>  —書評Histara:  <a href="http://histara.sorbonne.fr/cr.php?cr=4543">http://histara.sorbonne.fr/cr.php?cr=4543</a>  —国際シンポジウムGRAPHE: "David et Goliath"  公益財団法人鹿島美術財団 美術に関する国際交流援助 2024年3月  —研究過程の情報を活用しよう  日本経済新聞 「私見卓見」 2023年11月15日  —「想像展覧会」を創造する  生活の友社、美術の窓 12月号 「視点」 2023年11月  —新刊紹介：  『西洋中世研究』第15号、p. 183, 198、2023年12月</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------